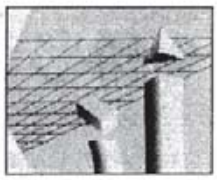
モノグラフ・高校生'90

vol.28 高校教師の生徒観とライフスタイル



千葉大学助教授　明石要一
上智大学教授　武内　清
神奈川県立湘南高校教諭　穂坂明徳
千葉県立上総高校教諭　畠山　滋
東京大学大学院生　大野道夫
上智大学大学院生　河野銀子

目次

はじめに …… 2
本報告書の要約 …… 3

第Ⅰ章　調査の意図と対象者の属性 …… 6
　1．調査の意図 …… 6
　2．調査の方法 …… 7
　3．調査対象者の特性 …… 7

第Ⅱ章　高校教師の特性と一日の生活 …… 9
　1．高校教師の特性 …… 9
　2．高校教師の一日の生活 …… 11

第Ⅲ章　高校教師の授業行動 …… 14
　1．授業のスタイル …… 15
　2．授業のときの服装 …… 18
　3．授業のモデル …… 19
　4．授業への自信 …… 22

第Ⅳ章　高校教師の教育指導 …… 25
　1．教育指導の範囲 …… 25
　2．教師―生徒関係 …… 27
　3．生徒についての知識 …… 29
　4．教育指導の実際と必要度 …… 33

第Ⅴ章　高校教師の同僚関係 …… 40
　1．仲のよい同僚 …… 41
　2．同僚間のつきあいと話題 …… 42

第Ⅵ章　高校教師の日常行動と悩み …… 45
　1．教師の日常行動と考え方 …… 45
　2．教師の悩み …… 49

第Ⅶ章　高校教師の指導タイプによる類型化 …… 53
　1．教師の指導による分類 …… 54
　2．教師の4類型 …… 57
　3．教師類型の規定要因 …… 59

まとめ …… 63

資料1　調査票見本 …… 65
資料2　基礎集計表 …… 77

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

●はじめに

「モラトリアム教師」「スランプ教師」「達観教師」「円熟教師」という高校教師の4類型を出した調査（モノグラフ高校生'83 vol.10）から6年が経過した。この6年間、高校進学率は94%前後で安定し、高校教育は教育界でもマスコミでも、あまり問題視されることがなくなった。高校に入学してくる生徒の能力、性格が多様化していることに、教師たちが驚かなくなり、多様化した生徒への対処のしかたが安定化してきたせいであろう。

そういう中で、高校教師は日々どのような生活を送り、どのような教育指導を行っているのであろうか。

当研究会でも、メンバーの高校教師が、自分や同僚の教師の一日の過ごし方の記録を持ちより、高校教師の仕事内容についての議論が続いた。その中で、学校による違い、教師の年齢による違い、個人差などが注目された。それをケースの分析にとどめないで、首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉）の先生方にご協力をお願いした結果が、この報告書である。お忙しい中、アンケートにお答えいただいた先生方に、深く感謝したい。

1990年2月

本書の執筆分担

明石要一　Ⅰ章　まとめ
武内　清　Ⅱ章（共同）　Ⅶ章（共同）
穂坂明徳　Ⅲ章　Ⅴ章
畠山　滋　Ⅳ章
大野道夫　Ⅵ章　Ⅶ章（共同）
河野銀子　Ⅱ章（共同）

本報告書の要約

第Ⅰ章　調査の意図と対象者の属性

①　本調査は、高校教師の属性、授業行動、教育指導の内容、同僚関係、一日の生活、悩み、タイプ等、教師の生活世界を明らかにしようとしたものである。

②　調査対象は１都３県（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の教師3,638名である。調査は郵送法により1,186名（回収率32.6%）の回答を得た。調査時期は、1989年７月である。

③　前回調査（モノグラフ高校生'83 vol. 10）との比較、教師のライフサイクル別比較、学校間比較などを通して、現代の高校教師の生活と意識の特質を明らかにしようとするものである。

第Ⅱ章　高校教師の特性と一日の生活

①　女性教師は、全体の２割いるが、その特質として、30歳以下、国公立大卒、普通科勤務、英語、国語、家庭担当、文化部顧問などがあげられる。

②　若い教師は大学進学率の低い学校に多く、年齢の上昇とともに進学率の高い学校へ移っていくというキャリアパターンが存在する。

③　車による通勤は半数を超える。とりわけ千葉と埼玉の教師は車通勤が７割を超える。

④　学校への到着時刻は始業の20～30分前が多い。早くから来ているのは、20歳代と50歳代の教師。女性教師は始業まぎわが多い。

⑤　退勤時刻は６時頃が多いが、それ以降も３割近くいる。女性教師は比較的早く帰る。

⑥　帰宅後の過ごし方は、新聞・読書、テレビ、仕事にそれぞれ１時間ずつ使い、11時過ぎに就寝する。

第Ⅲ章　高校教師の授業行動

①　教科書にそった授業をおこなっているのは、全体の９割。しかし若い20代の教師、私学出身の教師、工業科の教師などには、授業を工夫する傾向もあらわれている。

②　通勤時と授業時が同じ服装の教師は８割。男性教師はネクタイ派６割、ノーネクタイ派２割。女性教師は（セミ）フォーマル派３割、カジュアル派６割、に大別される。

③　３分の１の教師は、自分の授業に手本があるとしている。(1)高校時代の先生の授業４割、(2)先輩教師２割強、の順である。学校ランクによって授業のモデルが異なり、中ランク以下では、高校時代の先生をあげる割合が高い。

④　授業に自信がもてると感じるのは、教職歴４～５年と10年以上経過した時の２つに分かれている。高年齢の教師ほど、自信のもてる授業をするには、10年以上もの長期間の教師修業の経験が必要だと感じている。

第Ⅳ章　高校教師の教育指導

①　高校教師の仕事は多岐にわたっている。進学校の教師は教科指導に力を入れていればこと足りるのに対し、非進学校の教師はあらゆる機会をとらえて生徒と接し、指導していかなければならない。

②　女性の担任、20代の若手教師がよく生徒のことを知っている。次いで50歳以上の担任がよく知っている。また非進学校の教師が生徒のことをよく知っている。

③　半数以上の教師が、手作りの資料で授業をおこない、専門書をよく読み、講義ノートをつくっている。宿題を出す教師は少数派である。一方、生活指導面の仕事（生徒に電話、家庭訪問、バイクの指導等）も多い。

④　高校教師に必要な能力として、教科指導より生活指導の能力をあげる教師が多い。

第Ⅴ章　高校教師の同僚関係

①　９割の教師が仲のよい同僚がいるとし、(1)同性（７割）、(2)同年齢・同世代（６割強）で３分の２を占めている。20代教師、独身者は同世代でまとまり、30代前半の教師は職場において、教科、分掌、学年にわたって幅広い交遊関係がある。

②　同僚間の話題は、生徒や学校についてのものが圧倒的である。交遊的な行動まで共にするケースは少ない。

第Ⅵ章　高校教師の日常行動と悩み

①　「生徒といっしょにいると楽しい」（８割）、「学校にいるとき生き生きする」（７割）など教育に情熱を持つ教師は多い。

②　「学校にいるとき生き生きする」教師は、校長・教頭、20代、50代、既婚・子あり、教育系大学、埼玉県、商業科、体育、芸術・家庭、運動系顧問、大学進学率３～６割、９割以上の学校に多い。

③　教師の悩みのベスト５は、「雑用が多すぎる」（７割）、「研修の機会が少ない」（６割）、「生徒の考えや行動についていけない」（４割）、「生徒の学力レベルが低く教えがいがない」（４割弱）、「自分の専門的な力量に自信がない」（３割弱）である。

④　女性教師のほうが悩みが多く、とりわけ「自分の専門的な力量に自信がない」「研修の機会が少ない」と強く感じている。

⑤　若い教師は「自分の専門的な力量に自信がない」「自信をもって生徒の進路指導ができない」という悩みを持ち、年齢とともに「生徒の考えや行動についていけない」という悩みがふえる。

⑥　「生徒の考えについていけない」と感じることの多いのは女性、40歳以上、千葉、神

奈川、現在校に7～9年目か3年以内、工業科、大学進学率3割以下、体育、英語、国語担当、家での読書30分以内の教師である。

第Ⅶ章　高校教師の指導タイプによる類型化

①　教師の指導の傾向を、数量化Ⅲ類で分類すると、第Ⅰ軸に、積極的指導と消極的指導の2分化が出てくる。そして第Ⅱ軸に、生徒との距離大と小の2分化が出てくる。

②　この2つの独立した関係の分類軸を交差させて、指導形態による教師の4類型ができる。「生徒一体型」（積極的指導・生徒との距離小）、「生徒放任型」（消極的指導・生徒との距離小）、「生徒制御型」（消極的指導・生徒との距離大）、「生活指導型」（積極的指導・生徒との距離大）の4つである。

③　教師の類型は、年齢とともに「生徒一体型」（20代、30代前半）→「生徒放任型」（30歳代後半）→「生徒制御型」（40歳代）へと動く。50歳代で若干「生徒一体型」の方向へもどる。

④　非進学校には「生活指導型」が多く、進学校には「生徒放任型」教師が多い。

〔調査概要〕

対　　象●東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の教職員名簿からランダムに3,638名抽出し、調査対象とした。

調査方法●郵送法による質問紙調査

サンプル数●回収したサンプル数は1,186名で、回収率は32.6%である。

調査時期●1989年7月

第Ⅰ章 調査の意図と対象者の属性

1．調査の意図

当研究会は、6年前全国の高校教師を対象に教育観とライフスタイルを明らかにした。今回、新たに高校教師の研究をすすめるにあたり、次のようなねらいをもっている。

① 前回は、全国の教師を対象にしたのであるが、学校は福武書店の「進研模試」を利用している高校を対象にしたので、普通科のしかも比較的進学校の教師が多い、という制約があった。

今回は、対象を首都圏に限定し、1都3県(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の教職員名簿を母集団とし、10人等間隔で抽出する、というサンプリングを行った。つまり、学校や年齢、性差に偏りがでないような無作為のサンプリングを実施したのである。

② 前回の調査がサンプル対象に多少の偏りがあるものの、全国調査だったので(有効サンプル数1,843名)かなり全体的なしかも安定した傾向が読みとれている。その調査からすでに6年間が過ぎている。この間に、高校教師はどのように変化したのか、前回の結果との比較を試みようとした。

③ 教師の教育指導は変化する、という。それは、しばしば新卒時代とキャリアを重ねてきたときのギャップとして語られる。そこでは年齢とともに指導方法が変わる、ことが前提になっている。

もうひとつ、学校が変わるごとに教育指導

が変わることがある。とりわけ、学校格差のちがう学校へ移ったとき、指導方法が極端に変わることが多い、といわれる。

こうしたふたつの立場は、どれも事実であろう。教師の教育指導は、年齢とともに変わるし、相手となる生徒によって変わることもある。

そのふたつの立場を認め、当研究グループは、次のような作業仮説を用意したのである。「教師の教育指導は、赴任した学校、とりわけ日々教える生徒によって規定されるだろう」。

④　高校生の進学率が9割を超えた現在、教師の教育指導は進学率が5～6割の時代とは変わらざるを得ないだろう。

そうしたとき、教師の教育指導は、小・中学校の教師の方へスタンスを移すのか、それとも大学の教師の方へスタンスを移すのか、あるいは、新しいタイプをつくりだしているのか。そのような点も明らかにしたい。

本調査は、首都圏の高校教師を対象にしてこれら4つのねらいに答えようとするものである。

2．調査の方法

調査対象は、東京、神奈川、千葉、埼玉の1都3県の教職員名簿を母集団に無作為に10分の1ずつ抽出したものである（調査対象者3,638名）。

方法は、郵送法で有効回答サンプル数は、1,186名で32.6%。前回の回収率が19%であったことを考えると、かなり高いといえる。調査時期は、1989年7月1日～7月25日である。

3．調査対象者の特性

今回の調査に回答を寄せた1都3県の高校教師の基本的属性は、以下のとおりである。（総数、1,186名、数字は%、不明は省略）。

(1)　性別

男　性	女　性
80.1	19.4

(2)　年齢

25歳以下	26～30歳	31～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上
3.0	17.6	17.6	18.6	13.0	12.5	17.3

(3)　教職の経験年数

3年以下	4～6年	7～9年	10～14年	15～19年	20～29年	30年以上
4.9	13.0	15.8	21.5	13.4	22.5	8.3

(4)　担当教科

英　語	国　語	数　学	社　会	理　科	芸術・家庭	体　育	その他
14.3	15.4	11.8	14.3	13.3	7.6	11.0	11.9

(5) 出身学校（大学）

教育系大学（国公立）	教育系大学（私立）	教育系以外の大学（国公立）	教育系以外の大学（私立）	大学院	短期大学	その他
18.8	8.4	19.2	42.8	7.8	0.4	1.7

(6) 過去に勤務した経験

創設が戦前の高校（普通科）	創設が昭和24～50年の高校（普通科）	創設が昭和51年以降の高校（普通科）	職業高校	定時制高校	小・中学校
23.9	24.6	27.1	30.3	15.6	12.8

(7) 現在校勤務年数

1～3年目	4～6年目	7～9年目	10～15年目	16～20年目	21～29年目	30年以上
31.3	30.8	16.7	13.9	2.7	3.3	0.7

(8) 勤務校所在地

東　京	神奈川	埼　玉	千　葉	その他
27.0	27.9	20.8	23.3	0.3

(9) 学科

普通科	工業科	商業科	農業科	普通科と職業科の併設	定時制	その他
73.8	10.8	5.4	2.1	4.5	0.2	2.6

(10) 勤務校の4年制大学進学者の割合

30%以下	30～59%	60～79%くらい	80～89%くらい	90%以上	よくわからない
60.6	13.6	8.4	4.7	10.3	1.4

(11) 勤務校の共通一次受験者の割合

2割以下	3割くらい	半数くらい	7割くらい	ほぼ全員（9割以上）	よくわからない
74.4	9.4	4.6	4.0	1.1	4.3

(12) クラブ顧問

運動系	文化系	その他	な　し
53.1	42.7	1.4	2.1

(13) 役職

校長・教頭	教務	総務	進路指導	生活指導	厚生・保健	学年	教科	係・役職なし
0.3	16.9	8.0	12.7	19.3	8.0	20.8	5.5	3.8

(14) 結婚・家族

未　婚	既婚・子どもなし	既婚・子どもあり	その他
22.5	12.6	63.7	0.5

第Ⅱ章 高校教師の特性と一日の生活

今回の調査の対象者は、東京、神奈川、埼玉、千葉という首都圏の1都3県の教員名簿をもとに、無作為に10分の1ずつ抽出したものである。したがって、回答が均等に返ってくるものとすると、1都3県の高校教師の生活や意識の平均像を正確に知ることができる。郵送法による回収率は32.6%と、通常の郵送法による回収率をはるかに上まわっている。ただ若干考察の際に考慮しなければいけないことは、アンケートの回答者が高校教師の中でも教育熱心、研究熱心な人たちに多少かたよっているかもしれないということである。

本章では、高校教師の属性と一日の生活の部分（資料1調査票質問16 15 11）を考察する。

1．高校教師の特性

今回調査対象者になった教師の個々の属性については、第Ⅰ章および巻末の資料編に紹介されているので、ここでは目立った属性間の関係についてのみ考察する。

(1) 男性教師、女性教師

今回回答を寄せた教師の男女別内訳は、男性80.1%、女性19.4%、不明0.5%と、8割が男性、2割が女性である（これは全国平均に近い）。

男性教師と女性教師で、その他の属性に違いがあるだろうか。それをみたのが**表Ⅱ－1**である。この表から、女性教師の特徴として次のような点が指摘できるであろう。

① 年齢は20歳代が多い。30歳を過ぎて、女性が仕事を継続していくためには、強い意志と条件が整わなくてはならないせいであろう。

② 教科は、英語、国語、芸術・家庭科が多く、社会、理科、体育は少ない。

③ 男性に比べ、国公立大卒が多い（女性44.2%、男性36.7%）。

④ クラブは、文化系の顧問が多い。

⑤ その他の女性教師の特徴をあげれば、教職経験年数が短い者が多い（14年以下・女性69.9%、男性51.9%）。現在校勤務年数は、4～6年が多い（女性36.4%、男性29.7%）。勤務地は、多少であるが東京と神奈川が多く、千葉、埼玉は少ない。勤務している学科は、普通科が多く、工業科が少ない。役職は、厚生、保健が多い（15.0%）。

以上のように、高校において女性教師は2割と少ないため、その継続には、さまざまな条件が満たされることが必要であり、女性特有の役割（文化部顧問、厚生、保健の役職）を引き受けざるを得ないということがあるということである。

表II－1　男性教師と女性教師の違い

(%)

		男性		女性			男性		女性			男性		女性
年齢	30歳以下	18.0	<	32.0	担当教科	英語	12.3	<	22.9	クラブ顧問	運動系	59.1	>	29.2
	31～34歳	17.5		18.6		国語	12.8	<	26.5		文化系	36.6	<	68.4
	35～39歳	18.8		18.6		数学	13.7	>	4.3		その他	1.4		1.2
	40～44歳	13.6		10.7		社会	16.2	>	6.3		顧問はしていない	2.4		1.2
	45～49歳	12.9		10.7		理科	15.1	>	5.9					
	50歳以上	19.1	>	9.5		芸術家庭	4.1	<	22.1					
						体育	12.1	>	7.1					
						その他	13.6	>	4.7					

(2) 年齢

年齢と勤務校の4年制大学進学率との関係をみたのが**表II－2**である。

これによれば、若い教師が大学進学率の低い学校に多く、年齢の上昇とともに、進学率の高い学校へ移っていくというキャリアパターンをある程度読みとることができる。

若い教師が運動部の顧問をし（20歳代65.4%－50歳以上34.7%）、年齢の高い教師は文化部の顧問をする（20歳代32.7%－50歳以上55.1%）という役割分担もある。

表II－2　教師の年齢×勤務校の4年制大学進学率

(%)

進学率＼年齢	30歳以下	31～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上
30%以下	78.4	63.9	56.0	57.4	55.8	48.0
30～59%くらい	6.7	16.5	19.8	14.2	13.5	12.4
60～89%くらい	7.8	10.4	13.6	12.4	17.2	19.6
90%以上	4.5	8.3	9.9	13.0	11.7	16.9
よくわからない	2.6	0.4	0.4	1.8	1.2	1.8

2．高校教師の一日の生活

教師の通勤および帰宅後の時間の過ごし方を中心に、一日の生活をまとめたのが表II－3である。これから、次のような高校教師の生活の特徴を指摘することができる。

①　通勤手段

車による通勤が52.8%と多い。性別では、車による通勤は、男性（54.3%）のほうが女性（47.4%）より多少多い。しかし女性教師の5割弱は車で通っている。

車による通勤が多いのは、年齢の比較的若い層（30歳代前半が一番多く62.6%）で、電車・バスは40歳以上で増加する（50歳代50.2%）。

地域別では、車通勤は、千葉(74.3%)、埼玉（71.0%）に多く、次いで神奈川（51.6%）、東京は23.2%と少なく、3分の2が電車・バス通勤である。

②　通勤時間は、1時間くらいが一番多い(26.1%)が、それ以上は13.2%、それ以下は60.2%である。地域差が顕著で、30分以内(カッコ内は15分以内）は、千葉58.9(27.0)%、埼玉56.6（20.6）%に多いのに対し（これは車通勤の多い県と一致)、東京、神奈川では30分以内は、それぞれ23.2%、37.1%と少ない。1時間以上の通勤時間の者は、東京55.0%、神奈川42.0%（千葉27.6%、埼玉26.7%）に多い。

③　学校への到着時刻は、20～30分前が34.9%と一番多い。それ以上前は24.7%、20分以内とぎりぎりに来る教師が39.9%。

男女差があり、女性教師はぎりぎりに来る人が多い。5分前17.8%(男性8.9%)、10～15分前41.1%（男性26.6%）と、始業直前あるいはその間近は女性教師に多い。女性教師に家事や育児の負担がかかっているのであろう。

年齢別にみると、始業15分以内と比較的ぎりぎりに来るのは、40歳代前半(51.5%)と30歳代前半(49.2%)で、比較的早くから学校に来ているのは、20歳代(40分以上前；29.3%)と50歳以上（同；28.9%）である。

④　平日の退勤時刻は、6時頃が29.2%と一番多いが、それ以降が27.8%、それ以前が42.3%。女性教師の退勤時間が早い。女性は、5時までが20.6%、5時半までが34.8%と、

5時半までに、あわせて55.4%が学校を出ているが、その割合は男性では39.3%と2割ほど少ない。男性では7時以降と遅くに帰る者が31.2%いる(女性14.3%)。この退勤時刻の男女差は注目されよう。

⑤ 帰宅後の過ごし方は、新聞を読んだり読書をしたりが1時間くらい、テレビ視聴を1時間くらい、教材研究、事務処理など職務に関する仕事を1時間くらい、そして、就寝は11時～11時半というのが平均的な姿である。

女性教師の場合は、帰宅後の仕事時間は男性教師と変わらないものの、新聞や本を読む時間およびテレビをみる時間は、男性に比べ短くなっている(新聞、読書30分以内が男性30.6%、女性49.8%、テレビ視聴30分以内が男性28.2%、女性58.5%)。

表II－3　高校教師の一日

(%)

通勤	主な通勤手段	車 (52.8)　電車・バス 36.9　自転車 4.9 バイク・オートバイ 2.5　徒歩 2.0　その他 0.4
	通勤時間	15分以内 16.7　30分くらい 25.5　45分くらい 18.0 1時間くらい (26.1)　1時間半くらい 11.1　2時間くらい 1.8 それ以上 0.3
	学校への到着時刻 (始業何分前か)	5分前 10.6　10～15分前 29.3　20～30分前 (34.9) 40～50分前 17.4　60分以上前 7.3
	平日の退勤時刻	5時以前 14.9　5時半頃 27.4　6時頃 (29.2) 7時頃 21.4　8時頃 5.1　9時以降 1.3
帰宅後の時間	帰宅後、新聞や読書に費やす時間	ほとんどしない 5.4　30分くらい 28.9　1時間くらい (43.1) 2時間くらい 19.1　3時間以上 3.2
	帰宅後、テレビをみる時間	ほとんどみない 13.6　30分くらい 20.2　1時間くらい (42.2) 2時間くらい 20.9　3時間以上 2.6
	帰宅後、仕事をする時間	ほとんどしない 32.6　30分くらい 19.6　1時間くらい (34.2) 2時間くらい 11.3　3時間以上 1.8
	就寝時刻	9時以前 0.5　9時半 1.5　10時 8.0　10時半 11.3 11時 27.2　11時半 (28.3)　12時以降 22.8

(　) = 最大値

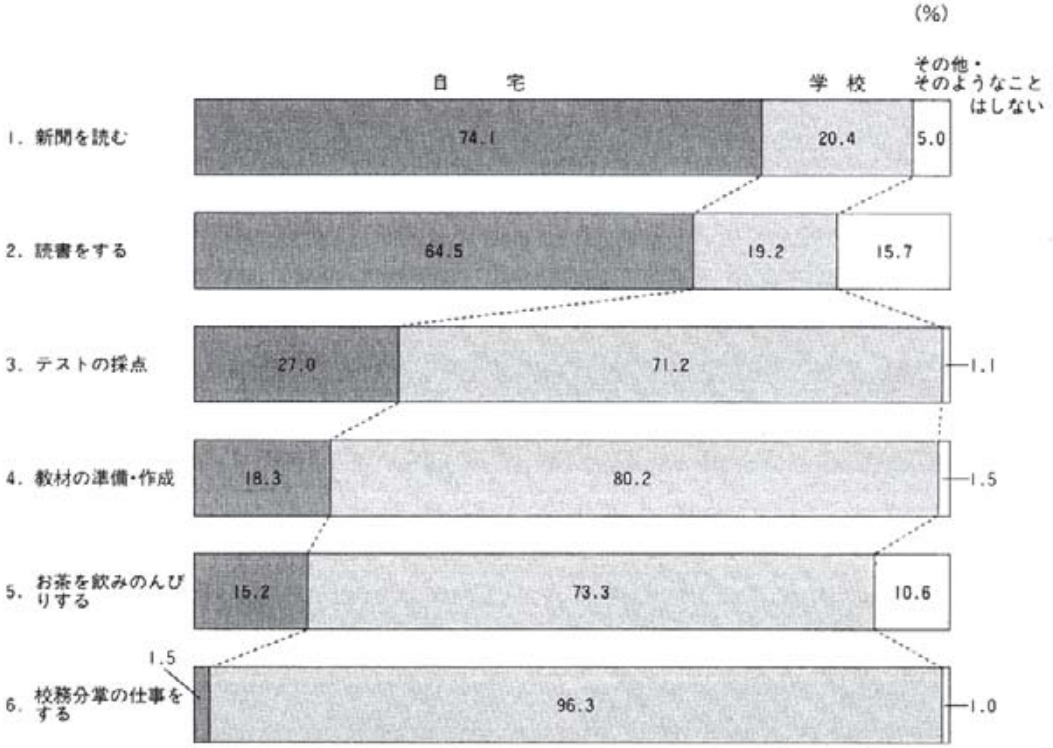
テレビ視聴時間は、年齢とともにふえている（1時間以上20歳代63.6%→50歳代74.2%）。

⑥　図II－1は、ふだんやっている主な場所についてきいたものである。

これをみると、教師がテストの採点や教材の準備・作成を家に持ちこんでいることがわかる。

一方、学校においても、新聞を読んだり、読書をしたり、同僚と雑談したり、お茶を飲みのんびりしたりの時間もある。このように、教師という仕事は、ビジネスマンと違い、職場と家庭をはっきり二分することができない側面を持っていることがわかる。

図II－1　ふだんやっている場所



第Ⅲ章 高校教師の授業行動

高校の授業は、いうまでもなく教科担任制がとられている。小学校とちがって、教科ごとに専任の教師が授業を担当し、さらに教師1人当たりの授業時数や担当学年を考慮して、同じ学年の教科の授業を複数の教師で分担して受け持つことが多い。したがって生徒の目からみると、どんな先生に授業を教えられるのかということは、クラス担任の場合と同様に大きな関心事となる。しかも高校では、生徒の帰属意識が学級よりも個々の授業のほうにより強く置かれる傾向もある。

学校生活を終えて何年後か、あるいは何十年後かに自分の高校時代をふり返ったとき、魅力のある授業、やる気の出る授業というものは、いつまでも忘れ難く印象に残っているものである。授業を形づくるのは、もちろん教師と生徒であるが、教師の手によって授業がどのようにすすめられ、また教室の雰囲気がどのようにつくられていくかということも見逃し得ない重要な側面であろう。思い出に残る授業というものは、その当時の教師の様子や授業のムードなどもリアルによみがえらせてくれるものである。

しばしば授業というものは、教師と生徒が共働して知(識)の探究を通してつくりあげる共同作品であると言われてきた。つまり授業を通して教師と生徒が共感しあい、共に啓発されることを言いあてたものである。とはいえ、教室の中で生徒に向き合う教師が魅力ある授業をつくりあげるためには、授業にさまざまの創意や工夫も必要であろう。教師のこのような授業に対する姿勢や試みが、ひるがえってその授業を生き生きしたものにさせる。ここでは、授業へのかかわり方を高校教

師の側からみたとき、授業のスタイルを構成し、規範として受け入れているものが何なのか。さらには長い教師生活の中で、そうした授業への自信はいつ頃獲得されていくものなのか、という点を明らかにしていきたい。

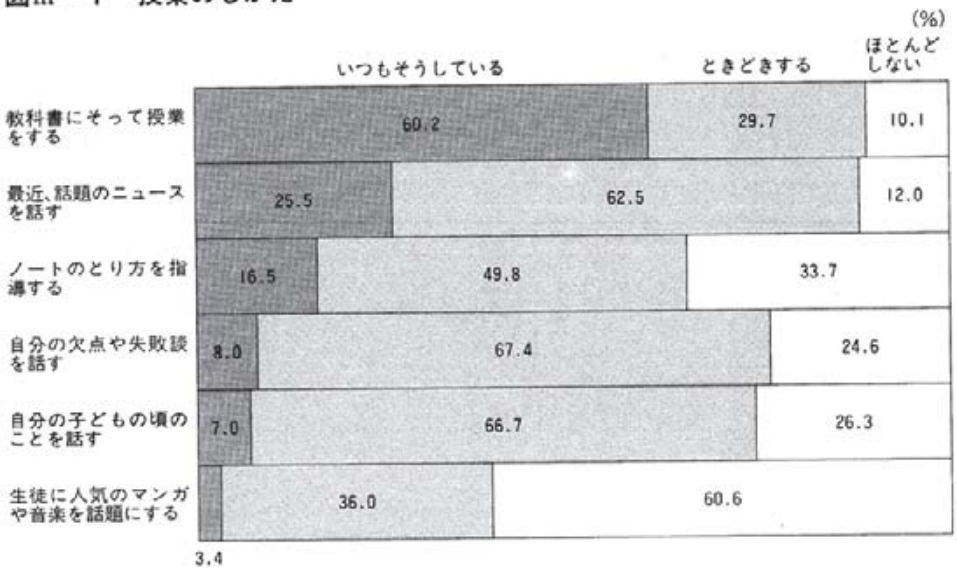
1．授業のスタイル

授業中の教師の行動は、授業を受けている生徒を除いては、まず一般の人の目にふれることはない。いわゆる授業の密室化である。したがって、授業についての評価は、教授内容（知識・技能）はもとより、授業のすすめ方（授業方法）をめぐっても、客観的な形での評価はなされにくい。日常的には、授業のはじめに教師があらかじめ意図したことが、その授業によってどの程度効果的に実現できたかということを把握したい時は、生徒の授業内容の理解度や授業中の反応などによって探るしかない。そのうえ、ややもすれば教師の独りよがりの授業であったり、自己満足の評価に終始してしまうことが多い。

そこでまず、教師たちのふだんの授業について、授業のしかたから高校教師のどのような特徴傾向が探り出せるのかをみてみたい。図Ⅲ－1は、授業のしかたとして、授業中にどのようなすすめ方や話題などの織り込み方をしているのかをみたものである。「いつも教科書どおりの授業をしている」と答えたのは60.2%、逆に教科書にそう授業は「ほとんどしない」と答えたのが10.1%である。授業のしかたとして、教科書を基本にする授業は、「ときどきする」（約30%）も含めてみると、高校教師のほぼ90%になる。しかし、本調査では質問項目を用意していなかったが、しばしば言われるように「教科書を教える」のか、「教科書で教える」のかが、この90%に達する高校教師の授業スタイルに実質的な枠をはめてくる点については、指摘しておかなければならない。

全体的な傾向としては「最近、話題になっているニュースを生徒たちに話す」（「いつも」25.5%と「ときどき」62.5%を合わせて88.0%）とか、「自分の欠点や失敗談を話す」（75.4

図Ⅲ－1　授業のしかた



%)、「自分の子どもの頃のことなどを生徒たちに話す」(73.7%)というような項目への結果からうかがえるように、教科書中心の授業が往々にして陥るマンネリ化や単調さを避ける意味でも、授業の中に時事問題をとり入れたり、教師の身近な話題を織り込んで、自分の授業に現実感と適度のリズムや親近感を出させるような工夫の意図がうかがえる。

一方、小・中学校段階と高校との授業に対する違いを感じさせているのが、授業中に「ノートのとり方を指導する」ようなことはしない高校教師が約3分の1、また「生徒に人気のあるマンガや音楽について話題にする」こともない教師が3分の2近くにのぼっている点であろう。

次に、授業のしかたを教師のもつ属性を通して、何かしら共通な特徴がみられないかどうかを調べたものが、**表Ⅲ－1**、**表Ⅲ－2**である。まず表Ⅲ－1は、上記の授業のしかた6項目を教師の性別、年齢でクロスさせた結果である。まず、男性教師と女性教師で授業のしかたのちがいは、女の先生は「ノートのとり方」をよく指導し、男の先生は「自分の欠点や失敗談」「自分の子どもの頃のこと」などを授業の中で生徒によく話しているところにみられる。どちらかというと、女の先生にきめの細かい指導が、他方男の先生に個性的な授業へのかかわり方があるようだ。

高校教師の年齢と授業のしかたの関連をみると、授業へのこうした個性的なかかわり方は、年齢の高い教師よりも若い教師に顕著に現れている。すなわち、「自分の欠点や失敗談」「自分の子どもの頃のこと」などは、20歳代の若い教師の約8割が授業の中で生徒に話しかけているが、教師の年齢の上昇とともに漸減傾向を見せている。同様のことは、「生徒に人気のマンガや音楽」についても言える。20歳代の教師は約6割が話題としてとり入れているが、30歳代になると4割程度、さらにこれが40～50歳代になると2～3割に減少する結果になっている。確かに20歳代の教師は、生徒との年齢的な近さもあり、共通の話題にしやすい一面があるが、それとともに授業の中で自己をさらけ出して、生徒と一体になって授業をつくっていくというエネルギッシュな姿勢がうかがえよう。

表Ⅲ－1　授業のしかた×性別・年齢

(%)

	性別		年齢					
	男性	女性	30歳以下	31～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上
教科書にそって授業をする	90.6	88.2	87.0	93.0	88.9	89.3	92.0	91.6
最近話題のニュースを話す	88.7	86.2	88.5	90.5	86.4	86.9	87.2	89.3
ノートのとり方を指導する	64.7 <	(73.5)	64.3	63.5	67.9	63.9	68.7	70.7
自分の欠点や失敗談を話す	(77.0) >	69.1	(78.4) >	78.7 >	78.2 >	73.9 >	66.3	73.7
自分の子どもの頃のことを話す	(75.5) >	67.6	(77.7) >	76.1 >	72.0 ≒	72.2 >	68.7	74.2
生徒に人気のマンガや音楽を話題にする	38.8	42.3	(57.2) >	47.4 >	38.7 ≒	33.8 >	28.2 >	23.6

「いつも・ときどきそうしている」割合

(　)＝最大値

教師のタイプとして、教員養成系の学部出身者とそうでない者との授業のしかたの特徴傾向を比較すると、私立の教員養成系出身者は、「教科書にそって授業」(98.2%) をしながら、「最近話題になっているニュース」(96.3%) などをとり入れた授業を多く行っているようである。その一方、国公立の非教員養成系出身の教師は、「ノートのとり方を指導」(77.1%) し、「自分の欠点や失敗談」(87.1%) や「自分の子どもの頃のこと」(84.4%) などを、むしろ教員養成系出身の教師以上に生徒によく話してやっているようだ。本調査結果からみる限り、どうも国公立の教員養成系出身者には、授業のしかたとして個性的な面が薄いようであり、他方私学出身者には、教員養成系であるか否かを問わず、例えば「生徒に人気のマンガや音楽を話題にする (教育系=50.5%、非教育系=42.4%) ようなことも、国公立出身者や大学院出身者などよりは、はるかに多く授業中行っている。独自の校風や独特のキャンパス・ムードの中で育ってきた私学出身者と、どちらかというと地味で堅実型の国公立出身者とでは、授業のしかたをとっても個性や肌合いの違いが現れてきているようである。

ところで、授業のしかたを規定する要因として、これまでは教師個人の属性に注目してみてきた。そこで次に、教師が勤務する学校の状況から、授業のしかたの在り様をみてみることにする。回答者の勤務校の所在地の違いからは、一貫して有効な特徴傾向はみいだせなかった。むしろ普通高校と職業高校の違いや大学進学率を通した学校ランクの違いによって、授業のしかたの差異が顕著であることがわかった (表Ⅲ－2)。

学科別でみると、普通科の教師はほぼ教科書にそって授業をするタイプが90%を占めている。この点では、工業科の教師もあまり変わらないが、工業科の教師はその上に「ノートのとり方を指導」(74.5%) し、授業の中に教師の個人的な体験談を織り込んだりして、普通科や商業科の教師以上に、授業を生徒に親しみやすくさせている。一般に普通科よりも職業科の教師に、授業に意匠をこらしている様子がうかがえる。しかもこの傾向は、どうやら現在の高校間格差を反映して、学校ラ

表Ⅲ－2　授業のしかた×学科・大学進学率

(%)

	学科				大学進学率			
	普通	工業	商業	普通＋職業	30%以下	30～59%	60～79%	80%以上
教科書にそって授業をする	(90.7) >	89.3 >	84.5	88.1	80.3 <	87.1 <	91.2 <	(93.4)
最近話題のニュースを話す	87.0	91.5	94.3	88.1	88.9	87.7	88.5	87.4
ノートのとり方を指導する	64.4	(74.5)	69.0	62.7	(71.1) >	66.9 >	60.8 >	49.6
自分の欠点や失敗談を話す	74.8	(79.0)	67.6	(83.1)	76.1	74.8	73.1	(80.7)
自分の子どもの頃のことを話す	73.1	(78.7)	70.4	(79.7)	72.8	75.9	74.8	(78.5)
生徒に人気のマンガや音楽を話題にする	39.3	43.2	(45.1)	35.6	(41.6)	(40.4)	32.7	33.4

「いつも・ときどきしている」割合

( )＝最大値

ンクに応じた授業のスタイルを教師に規範化しているようである。すなわち、進学率の高い高ランク校の教師ほど、「教科書にそって授業」をしており（最高ランク校93.4%＞最低ランク校80.3%）、また一方低ランク校の教師ほど、「ノートのとり方を指導」（最低ランク校71.1%＞最高ランク校49.6%）し、「マンガや音楽」などの生徒が興味をもつような話題を授業で触れながらすすめていることが明らかになった。

そこで、さらに年齢条件を加味して、年齢と学校ランクに規定された授業のしかた6項目の結果をみてみると、同一ランクにある学校の中でも、教師の年齢によってかなり授業のしかたが異なっている、ということがわかる。特に「教科書にそった授業」「最近話題のニュースを話す授業」「ノートのとり方を指導する授業」の3項目については、学校ランクと年齢による変化の差が大きくなっている。

つまり、「教科書にそった授業」のスタイルも、低・中ランク校では若い20歳代や30歳代前半までの教師の間に比較的多くみられるが、これが高ランク校になると、圧倒的に45歳以上という高年代の教師の授業スタイルになっているのである（中ランク校の20歳代66.7%＞高年代52.0%、高ランク校20歳代57.6%＜高年代71.3%）。ところが「ノートのとり方を指導する授業」のスタイルでは、その逆で、低・中ランク校ほど高年代のベテラン教師に比較的多くみられ、高ランク校の年輩教師にはきわめて少ないスタイルになっているのである（中ランク校20歳代11.1%＜高年代30.0、高ランク校20歳代12.1%＞高年代7.8%）。

2．授業のときの服装

ところで授業場面は、角度を変えてみると、教師によってはまさに仕事の現場である。通例職種によっては、通勤服と職場着を分けて着用することも多い。高校教師の場合はどうであろうか。**図Ⅲ－2**は、通勤のときと授業をするときで服装を変えているかどうかをきいた結果を示してある。高校教師の8割は、特に着替えることもなく通勤服で授業に赴いているようである。

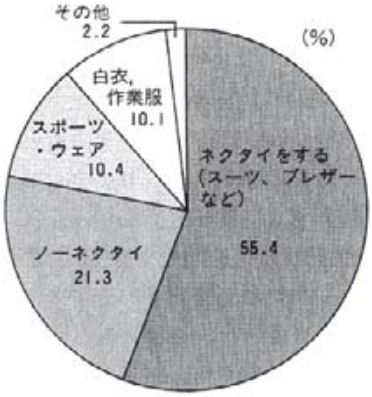
かつて、通勤のときの服装やスタイルについて、「高校教師としての職業柄意識」をたずねたことがある（モノグラフ・高校生'83 vol. 10）。その時には、職業柄を積極的に意識した服装をしている教師29%、ほどほどに意識している教師37%、そして職業柄にこだわらない教師34%という結果であった。約6～7割の高校教師は何らかの職業柄意識を通勤服に持っていた。この傾向からすると、通勤のときと授業をするときで服装を変えていない教師は、すでに通勤時の服装に教師らしさをおのずと出しているのであろう。

それでは、ふだん実際に授業をするときの服装はどうであろうか。男性教師と女性教師に分けて、その結果を**図Ⅲ－3**に示した。男

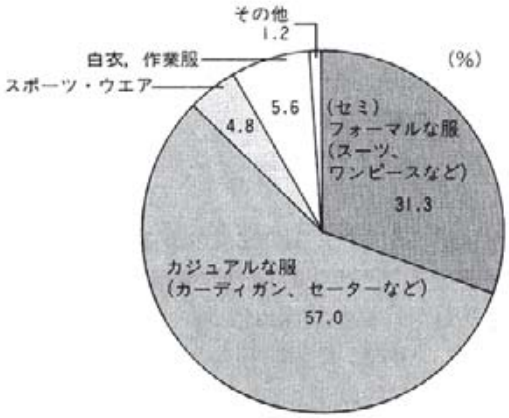
図Ⅲ－2　通勤と授業のときで服装を変えるか

図Ⅲ－3　授業をするときの服装

男性教師の場合



女性教師の場合



性教師の場合は、ネクタイ派55.4%、ノーネクタイ派21.3%、スポーツ・ウエア及び白衣・作業服各10%強という結果である。一方、女性教師の場合は、(セミ)フォーマル派31.3%とカジュアル派57.0%に大別できる。全体として、男性教師はネクタイを着用するフォーマルタイプが、また女性教師にはカジュアルタイプが優勢であることがわかった。

3．授業のモデル

ところで授業には、すでにみてきたように教師や勤務校のさまざまな条件によって、オーソドックスなスタイルで行われている場合もあれば、個性的な授業を工夫して行っている場合もある。高校教師が自分の授業スタイルを形成する出発点は、おそらく大学時代に行う教育実習期間であろう。さらに、新採用教師として教壇に立ってから、いろいろな授業の試行錯誤をくり返しながら、一人前の教師として成長し、その人なりの授業のスタイルも確立していくことになる。その場合、授業のスタイルを形づくる手がかりとして、どのようなものが考えられているのであろうか。

図Ⅲ－4は、「あなたの授業のしかたにはモデルがありますか」とたずねた結果を図示したものである。自分の授業には、何らかのモデルになっているものがあるというのは32.2%、他方モデルなどはないというものは65.4%で、全体の約3分の1の高校教師の授業には、手本となるような授業のイメージがあることになる。さらにそれを具体的にあげてもらうと、**表Ⅲ－3**にまとめたように、最も影響を受けているのは「自分の高校時代の先生」(37.9%)、次いで「先輩教師」(24.3%)、「大学時代の先生」(8.8%)、「自分の小・中学校時代の先生」及び「同僚教師」(各7.9%)ということであった。

こうした授業のしかたのモデルをあげた高校教師には、どんな特徴があるのか。それをまとめたのが**表Ⅲ－4**である。この表の結果を要約すると、まず、性別では女性教師に先輩教師の授業のしかたの影響がより強く現れている。また、当然ながら経験の浅い若い年代の教師ほど授業のモデルがあると答えて

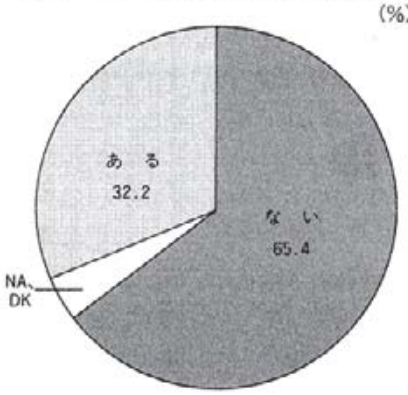
おり、30代の中堅教師になると教職にも精通し、いろいろな先生の授業も見聞しているためか、「高校時代の先生」(42.4%) や「先輩教師」(29.4%)の影響をあげる教師が多くなっている。他方、高年代になると、自分ほどベテランの教師がまわりにいなくなるためか、「大学時代の先生」(20.4%) をあげているのが目立ってくる。

出身大学でみると、国公立大学出身者に比べて私学出身者のほうが、自分の授業に手本となる先生がいると、相対的に多く答えている。そうした中で、「先輩教師」の影響は、国公立の非教育系と私学の教育系に、各30%と際立っている。また大学院出身者には、やはり「大学時代の先生」をあげる教師が多い。しかし一般に、国公立の教育系出身者は、授業のモデルなどを他に求める傾向が少ないようである。また、埼玉の教師は「高校時代の先生」(47.0%)の影響を、そして千葉の教師は「先輩教師」(34.3%) の影響をあげる割合が、それぞれ他の都県と比較して相対的に高くなっている点も、併せて指摘できよう。

ところで、勤務する学校の態様は、教師自身の授業のしかたにも変化を与えてきた。ひるがえってそのことは、教師自身が自分の授業をつくる上で手本を何に求めているか、と

図Ⅲ－4　授業のしかたのモデル

(%)



表Ⅲ－3　授業のしかたに影響を受けた先生

(%)

自分の高校時代の先生	37.9
先輩教師	24.3
大学時代の先生	8.8
自分の小・中学校時代の先生	7.9
同僚教師	7.9

いうことが問題になる。中ランク以下の高校教師、また商業科の教師には、高校時代に教わった先生の授業のしかたの影響がかなり出ているようである（40～45%）。「先輩教師」や「大学時代の先生」をあげるのは、高ランクの高校にいる教師たちである。やはり勤務する学校が置かれた学校ランクによって、教師の授業もまたその授業モデルも、かなり違ってきているようである。

時に、教科が違えば授業の形態も異なる。各教科に特徴があり、一概に比較することはできないが、教科によって高校教師は、授業のモデルを何に求めているのか、その傾向を比較してみることは興味深い。**表Ⅲ－5**は、授業のしかたのモデルの割合を担当教科で比較したものである。一目して明らかな点は、項目によって比率の最大がばらついていることであろう。そうした中で、やや共通した特徴を認めるとすれば、「自分の高校時代の先生」をあげているのは、国語（51.7%）＞数学（46.7%）＞社会（43.1%）の教師の順に多く、その一方、技能教科と目される英語（26.9%）＜芸術・家庭（30.0%）＜体育（34.1%）などはかなり低くなっている。その分、比率の最大値に注目すると、体育→先輩教師（39.0%）、芸術・家庭→大学時代の先生（13.3%）、英語→同僚教師（12.8%）といったように、授業のしかたのモデルの求め方に他教科にない傾向的な特徴を探ることができそうである。

以上みてきたように、高校の授業では教師自身が、少なからず規範とするような授業のイメージをもって行っているようである。日々の授業を充実させていく上で教師みずからの成長にあずかる、このような潜在的な影響力が存在している点は注目に値しよう。

表Ⅲ－4　授業のしかたのモデル×教師の属性

(%)

		性別		年齢						出身大学					学校所在地			
										国公立		私立						
		男性	女性	30歳以下	31～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50歳以上	教育系	非教育系	教育系	非教育系	大学院	東京	神奈川	埼玉	千葉
授業のモデル	ある	32.2	32.8	38.3	31.7	35.0	32.5	30.1	24.4	23.7	30.3	39.4	36.5	26.5	28.3	34.9	30.5	35.5
	ない	66.1	63.6	59.5	67.8	62.6	64.5	66.9	73.8	73.1	69.3	59.6	61.7	71.6	67.7	63.5	68.0	63.5
ある場合	自分の高校時代の先生	37.5	39.8	39.8	39.7	42.4	34.5	30.6	34.5	32.8	41.9	39.5	41.2	22.2	37.0	43.3	47.0	25.0
	先輩教師	22.3	31.3	27.2	23.3	29.4	20.0	14.3	25.5	22.4	30.2	30.3	22.1	14.8	17.0	22.0	24.1	34.3
	大学時代の先生	10.4	2.4	3.9	4.1	8.2	9.1	20.4	14.5	12.1	2.3	7.9	7.8	22.2	11.0	5.5	4.8	13.0
	自分の小・中学校時代の先生	8.0	7.2	3.9	5.5	5.9	16.4	10.2	10.9	8.6	4.7	5.3	7.4	14.8	10.0	7.9	4.8	8.3
	同僚教師	7.7	8.4	8.7	4.1	7.1	9.1	16.3	3.6	6.9	9.3	5.3	7.4	14.8	9.0	5.5	12.0	6.5

◯＝最大値

表Ⅲ－5　授業のしかたのモデル×担当教科

(%)

	英語	国語	数学	社会	理科	芸術・家庭	体育
自分の高校時代の先生	26.9	51.7	46.7	43.1	34.6	30.0	34.1
先輩教師	23.1	18.3	20.0	24.1	25.0	33.3	39.0
大学時代の先生	6.4	5.0	11.1	8.6	5.8	13.3	7.3
自分の小・中学校時代の先生	5.1	8.3	2.2	3.4	13.5	10.0	7.3
同僚教師	12.8	6.7	4.4	10.3	5.8	3.3	4.9

○＝最大値

4．授業への自信

終わりに、それではいったい、教師としての成長を考えるとき、授業への自信なるものはいつ頃からもてるようになるのであろうか。教師を志した者なら誰しもが感じる、新採用教師として初めて教壇に立ったときの感激と授業への不安感。若い教師には、それはいつの日にか、あの自信に満ちた先輩たちの授業に追いつき、追いこせといった、教師としての1つのメルクマールにもなる。

図Ⅲ－5は、「自信をもって授業にのぞめるようになったのは、教師になって何年目から」かと、端的にたずねた結果である。

授業への自信がもてるようになる一つの山は、教師になってから4～5年目（21.4%）であり、もう一つは10年以上（13.6%）経ってからということである。高校教師としての4～5年目は、通例学級担任として1サイクル終えて初めての卒業生を送り出し、多少学校の様子も見えてきて、生徒との接触にも余裕を感じられるようになる頃である。そのことは授業についても言える。教材の蓄積も増え、ひととおりの学年を経験したことにより、授業の進度や生徒の学習上の困難点も把握できるようになってきて、生徒とともに歩む授業に楽しさすら感じられてくるのである。

しかし、教師としてのライフサイクルを長いスパンで見ると、自分の授業に対する自信のもち方は、もう少し違った位相になってくる。**表Ⅲ－6**は、授業への自信を教師の性・年齢でクロスした結果であるが、男性教師の場合は、4～5年目に授業への自信をもてるようになると答えた割合は女性教師よりも相対的にやや高い。その一方、女性教師では、「まだそう思えない」と感じているのが半数近くにまでのぼっている。全体としては37%程度であるから、これはかなり高い数値であるといえよう。

年齢でみると、40歳代前半が教師として、授業への自信感に対する大きな分岐点のようである。つまり、30歳代までは、教壇に立って4～5年目にもてるようになった自信めいたものが持続されていたが、教師経験が20年にも及ぶと、若い頃につかめたと思われた授業への自信感は揺らいでいる。かつて獲得され

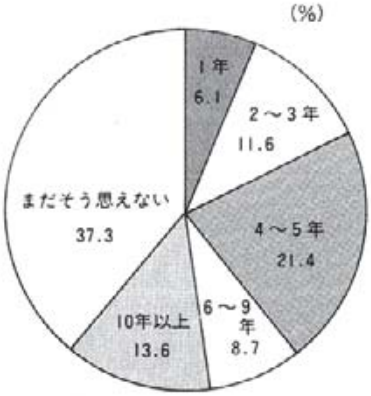
た教育知識や教育技術は、急激に進む時代の変化に年々陳腐化していく。他方、教師として経験を積めば積むほど、むしろ授業というものを厳しい目でとらえようとするためか、10年以上も教師修業を積まなければ、一人前の教師と呼ばれるような授業への自信など、なかなかもてるものではないと感得させられるようである。

この辺で、これまでの考察のまとめをしておこう。高校教師の授業のしかたには、教師個人のタイプの違いとともに、教える学校の様子によって、例えば教科書をなぞる授業で終わるのか、または自分の個性を出した授業になるのかが決まってくるようだ。それはまた、構えた授業か普段着の授業になるのか、という問題でもあり、授業のときの服装は、教師の職業柄意識ともからんで、授業に向かう教師の姿勢を少なからず映し出している。

教師の3分の1は、手本となるべき授業のイメージをもっていて、そうした規範となる授業は、多くは自分が習った高校時代の先生の授業に影響されている。したがって高校教師が育ってきた学校環境と、現在の勤務校での授業がマッチしていれば問題はないが、ミスマッチの場合には、そうした授業はかなりの混乱と、時には問題状況をすら引き起こしかねなくなる。

そうした問題を回避するには、授業によって教師も磨かれるという生き方が肝要であり、教師としてのライフサイクルの中で、授業への自信をのぞかせる4～5年目、そして10年後の節目を教師としてどう生かしきるかが課題となろう。

図Ⅲ－5　授業への自信



表Ⅲ－6　授業への自信×性別・年齢

(%)

	性別		年齢					
	男性	女性	30歳以下	31～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49	50歳以上
1年やって	6.9	2.8	7.1	5.7	6.6	6.5	5.5	4.9
2～3年	12.2	8.7	16.7	13.5	9.5	8.9	9.8	8.4
4～5年	22.0 >	19.4	20.8	19.1	28.0	21.3	20.9	18.2
6～9年	9.0	7.5	0.4	11.7	11.5	11.8	9.2	9.8
10年以上	13.7	13.4	0.0	3.0	8.2	20.1	30.1	30.2
まだそう思えない	35.2 <	46.6	54.3	46.5	35.4	30.2	23.3	26.2

第Ⅳ章 高校教師の教育指導

1．教育指導の範囲

ある高校で、ベテランの学年主任が、若手教師から次のような質問を受けた。

「先生、生徒指導と部活と授業では、どれが一番大切なのでしょうか。」

高校進学率の上昇に伴い、高校教師の指導内容も大きく変化してきている。前章では、授業に焦点をあてたが、授業以外の仕事が増えていることは間違いない。そこで第Ⅳ章では、授業外まで視野を広げ、高校教師の指導内容を問い直してみることにしたい。

高校教師がどのような仕事をしているか。まず、3人の教師の一日の行動記録をみてみよう。

○A教諭（男性、43歳、社会科、副担任）

8：10	学校着
8：20	職員打ち合わせ
8：30～9：20	授業
9：30～10：20	ノート整理、プリント準備。
10：30～11：20	授業
11：30～12：20	授業
12：20～13：10	昼休み：弁当。生徒が発表用のプリントを取りに来る。教育実習生が就職決定を報告に来訪。
13：10～14：00	選択講座の内容を同僚と協議。
14：10～15：00	授業

15:05～15:30	選択講座の内容を同僚と協議。
15:30	特別指導の生徒と話す。
15:35	部活の生徒に指示。
15:40	職員室でプリント印刷依頼。
15:45～	選択講座の内容を清書、及び資料の作成。

○Ｂ教諭（男性、31歳、社会科、１年担任）

8:00	学校着 教室のゴミ拾い、机の整とん。
8:30	職員打ち合わせ
8:40	自習監督を割り当て、黒板に記入。
8:50～8:55	S.H.R.
9:00～9:50	授業
9:55～10:45	出席簿をチェックし、未登校者10名に電話。プリント印刷。
10:55～11:45	授業
11:50	クラスの生徒が、頭痛で早退したいと申し出る。許可せず。
11:50～12:40	退学予定の生徒Ａ君の報告書下書き。
12:40～13:25	昼食。食後、生徒指導の先生より連絡、クラスの生徒が無断外出していたのをつかまえた、ライターを所持しているとのこと。正門まで引き取りに行く。職員室でライターの入手経路、日頃の喫煙状況を調査。生徒指導主任に報告する。
13:30～14:15	Ａ君と父親来校。両者の意志を再度確認し、退学願いを受け取る。
14:20～15:10	授業
15:10～15:25	清掃指導
15:25～15:35	S.H.R.
15:40	欠席の生徒、無断早退の生徒の家へ電話。
15:55	部活の様子を見る。
16:10	ライター所持の生徒が明日より停学と決定。各教科の先生に停学中の課題を依頼。
16:30～17:40	Ａ君の退学報告書清書。
17:50	停学となる生徒の保護者に電話。
18:00	部活の生徒を帰宅させる。提出させたプリントに検印、チェック。

○Ｃ教諭（女性、35歳、理科、副担任）

8:25	学校着、免許関係の書類を確認。
8:35	朝の打ち合わせ
8:40～8:50	免許証提出状況を確認、担任へ連絡。
8:50～9:40	免許証保管の整理、指導部長と連絡。
9:50～10:40	授業
10:40～10:50	欠席の多い生徒３人と話す。
10:50～11:40	授業
11:50～12:40	スクールコート、制服の検討、業者から電話。昨日の自習課題をチェック。
12:40～13:20	生徒２人教習所入所許可願いを提出。許可証を作成し担任へ。
13:20～13:25	教室・廊下見まわり。
13:25～14:15	授業
14:25～15:15	免許証の保管・預り証の発行。教習所への入所手続き。12月下旬の交通安全指導の方法検討。
15:15～15:40	掃除
15:50～18:30	学年会
18:30～19:45	各担任と連絡、教育課程改善委員会の資料コピー、部屋の点検。

高校教師の仕事が多岐にわたっていることがよくわかる。特に、Ｂ教諭、Ｃ教諭は、授業以外の仕事がかなりのウエイトを占めている。この点に留意しつつ、データを検討していこう。

2．教師―生徒関係

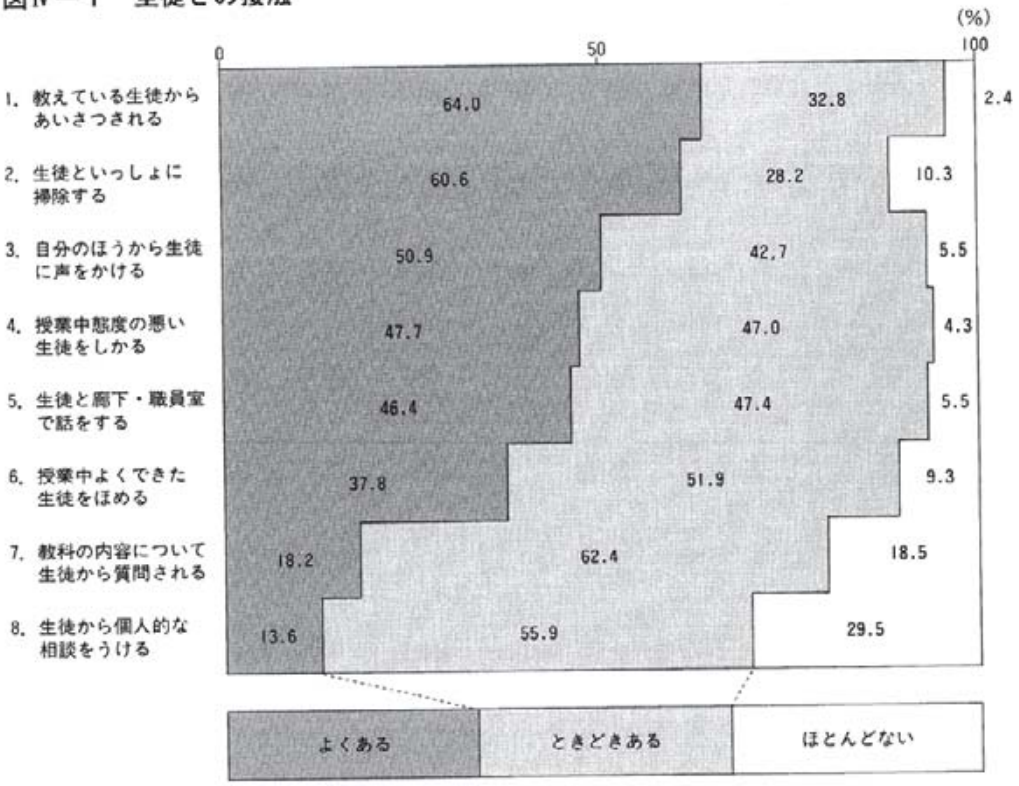
まず、教師が生徒と日常どのくらい接触しているかみてみよう。（図Ⅳ―1）。

「教えている生徒からあいさつされる」は、「ときどき」も含めると全員に近い（96.8%）。「生徒といっしょに掃除」では、「よくある」が6割に達する。「うちの学校では、まず教師がほうきを持たないと、生徒は掃除をしませんから」という話もきく。積極的に生徒と身体を動かすというよりは、必要に迫られての結果かもしれない。

「自分から生徒に声をかける」も「よく」が半数を超える。また、「生徒と廊下・職員室で話をする」も46.4%になる。もちろんこれらは、内容も問題になる。「中間テストずいぶん上がったじゃないか」「今度の大会がんばれよ」と、ほめたり激励したりしているのか、「おい、そのスカートは何だ！」と注意・説教をしているのか。内容によって数値の意味は、異なるであろう。ここでは、半数の教師が、よく生徒に声をかけ、話をしている点だけ確認しておこう。

授業中に関しては、よく「しかる」が47.7%にのぼる。しかし、「ほめる」も37.8%あり、3人に1人以上が、日常的に生徒をほめている。教師側からは、かなり積極的にコンタクトをとっている様子がうかがえる。しかし残念ながら、生徒のほうからの接触はそれほど多くない。「教科内容について生徒から質問される」ことがよくある教師は18.2%、「個人的な相談」をよく受ける教師は13.6%にと

図Ⅳ―1　生徒との接触



どまる。

表Ⅳ－1は、接触状況を属性別にまとめたものである。

男女別では、8項目中7項目で女性教師の数値が高い。女性教師のほうが、こまめに生徒と接している。

年齢別では、30歳以下の若い教師がよく生徒と接している。項目ごとに年齢による数値の推移をみると、「あいさつ」は年齢とともに、頻度が増す。「掃除」「話」「質問」では、逆に年齢が上がると、数値は落ちる。しかし、「しかる」「ほめる」「相談」は、「35～39歳」の教師が最も少ない。興味深い結果であるが、詳しい分析は後の章にゆずることにする。

大学進学率別のデータに、目を移そう。進学率30％以下の高校では、「いっしょに掃除」「自分から声をかける」「態度の悪い生徒をしかる」「話をする」「ほめる」の数値が高い。このグループの高校には、いわゆる「教育困難校」もかなり含まれていよう。このような高校では、教師の側からあらゆる機会をとらえて生徒と接し、理解・指導していかねばならない。前掲の項目で高い数値が出るのも当然といえよう。

一方、進学率90％以上の高校では、「あいさつされる」「教科内容について質問される」「個人的な相談」の数値が高くなっている。

勤務校の大学進学率（ランク）によって、教師の仕事内容が大きく異なることが、はっきりと読みとれる。

表Ⅳ－1　生徒との接触×性別・年齢・高校格差（進学率による）

(%)

	性別		年齢			高校格差（進学率による）			
	男性	女性	30歳以下	35～39歳	50歳以上	30%以下	30～59%	60～89%	90%以上
1.教えている生徒からあいさつされる	61.9	73.5	58.0	64.2	68.9	59.7	69.7	71.3	74.8
2.生徒といっしょに掃除する	58.7	69.6	74.7	58.4	47.6	65.2	60.1	52.6	47.4
3.自分のほうから生徒に声をかける	48.2	62.5	61.0	49.4	41.3	55.2	50.6	40.9	42.2
4.授業中態度の悪い生徒をしかる	48.9	44.3	50.6	40.7	54.7	56.0	41.0	31.6	34.8
5.生徒と廊下・職員室で話をする	43.5	58.9	56.1	49.8	34.2	50.4	43.3	39.8	37.0
6.授業中よくできた生徒をほめる	36.6	43.9	42.8	32.5	38.7	39.6	41.6	33.9	28.9
7.教科の内容について生徒から質問される	17.6	20.6	19.3	17.7	15.6	15.0	18.0	24.6	28.9
8.生徒から個人的な相談をうける	12.9	16.2	14.5	12.8	14.6	12.9	14.0	14.6	17.8

「よくある」割合
◯＝最大値

3．生徒についての知識

前項でみた日常の接触や各種の資料から、高校教師は一人ひとりの生徒について、どの程度知識をもっているのだろうか。

図Ⅳ－2は、担任教師が自分のクラスの生徒についてどのくらい知っているかたずねた結果である（担任をしている教師は全体の45.1%）。

81.7%の担任が、自分のクラスの3分の2以上の生徒の授業態度を知っている。担任は自分のクラスの授業を持つことが多いことを考えれば、当然といえよう。「成績」についても、通知表の作成は担任の仕事であるから、よく知っていることになる（「3分の2以上」76.1%）。

しかし、「3分の2以上知っている」割合が半数を超える項目は、「部活動」を加えた3つだけである。特に、「友人・友人グループ」について、3分の2以上の生徒について知っている担任は38.4%にとどまる。友人同士のコミュニケーションの楽しさは、生徒の学校生活を支える大きな柱である。この点を考えると、担任はもっとクラス内の友人関係を知っていてよいように思える。

表Ⅳ－2と**図Ⅳ－3**では、属性別のデータをまとめてある。女性の担任、30歳以下の若手がよく生徒のことを知っている。次いで50歳以上の担任の知識が多い。

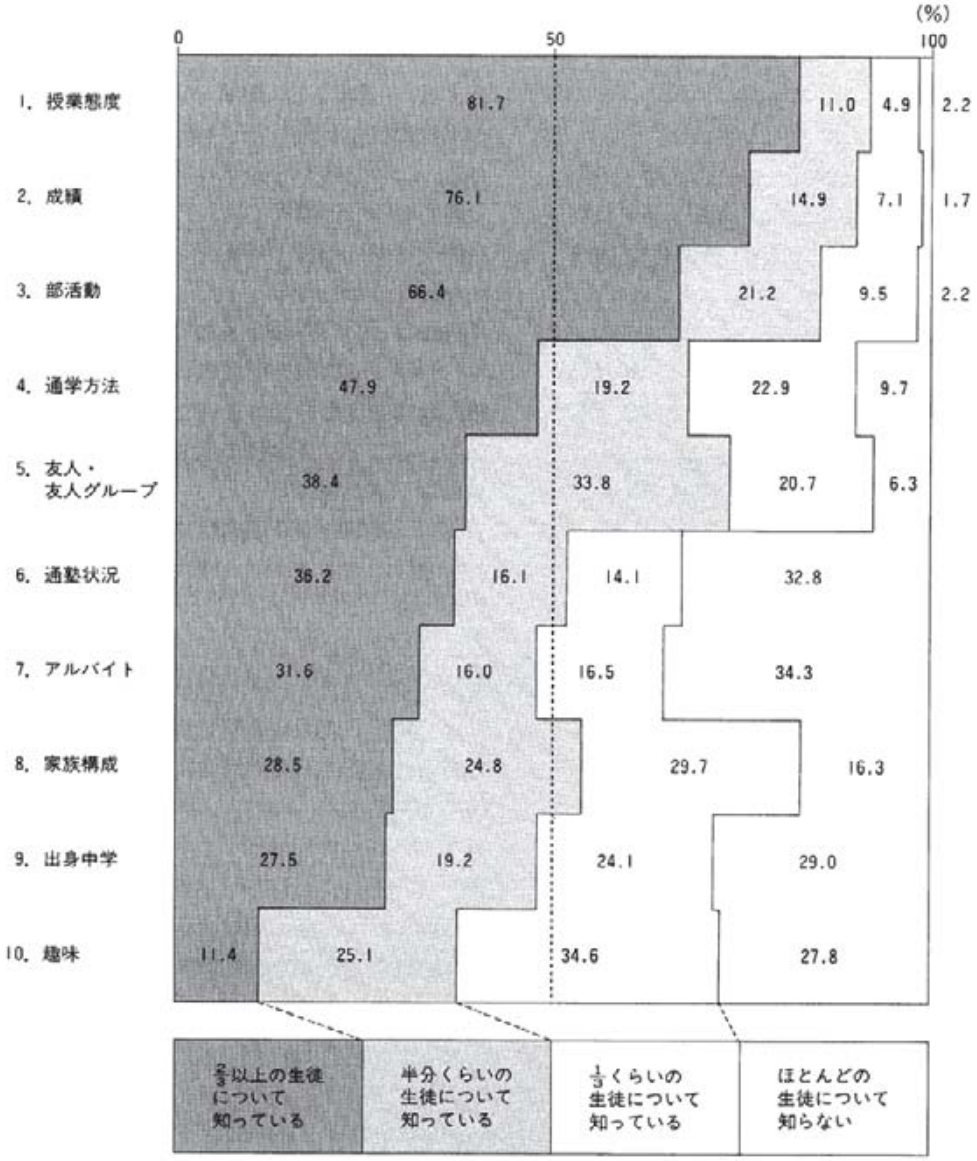
進学率別のデータ（**表Ⅳ－3**）では、「半分くらいの生徒について知っている」まで合わせると、「通塾」と「趣味」を除き、30%以下の高校の担任が最もよく生徒のことを知っている。この背景を考えてみよう。

進学率の低い高校では、クラスに1割以上点数不足から進級・卒業が危ぶまれる生徒をかかえることもある。そのような生徒について担任は「○○科は合格まであと○点」というレベルまで成績を把握する。成績の悪い生徒は授業態度も芳しくないことがしばしばである。そこで、全教科の授業態度をチェックしておく必要がある。

また、遅刻をくり返す生徒を指導するうちに、通学の方法とルートは自然と頭に入る。行事の際の作業では、友人グループを活用しないと、生徒は動かない。また、急に様子がおかしくなったり、休んだりした生徒については、親しい友人に事情をたずねるのが有効である。家庭連絡や訪問の回数が重なり、生徒の家族構成はもちろん、両親の仲の良し悪しまでわかってしまうこともある。非行グループの対立は、しばしば出身中学を反映する。

このように、非進学校の担任教師は、生徒についてのさまざまな知識・情報を駆使しないと、なかなか指導が成り立たない。進学率別のデータの背景には、こんな事情があるとみてよいだろう。

図Ⅳ－2　自分のクラスの生徒についての知識



表Ⅳ－2　自分のクラスの生徒についての知識×性別

(%)

	男　性	女　性
1．授業態度	80.0	80.9
2．成績	73.3	88.9
3．部活動	67.5	62.0
4．通学方法	47.3	50.3
5．友人・友人グループ	35.8	50.0
6．通塾状況	36.7	34.3
7．アルバイト	30.0	38.0
8．家族構成	25.0	44.4
9．出身中学	26.7	30.6
10．趣味	10.2	16.7

「$\frac{2}{3}$以上知っている」割合

表Ⅳ－3　自分のクラスの生徒についての知識×高校格差

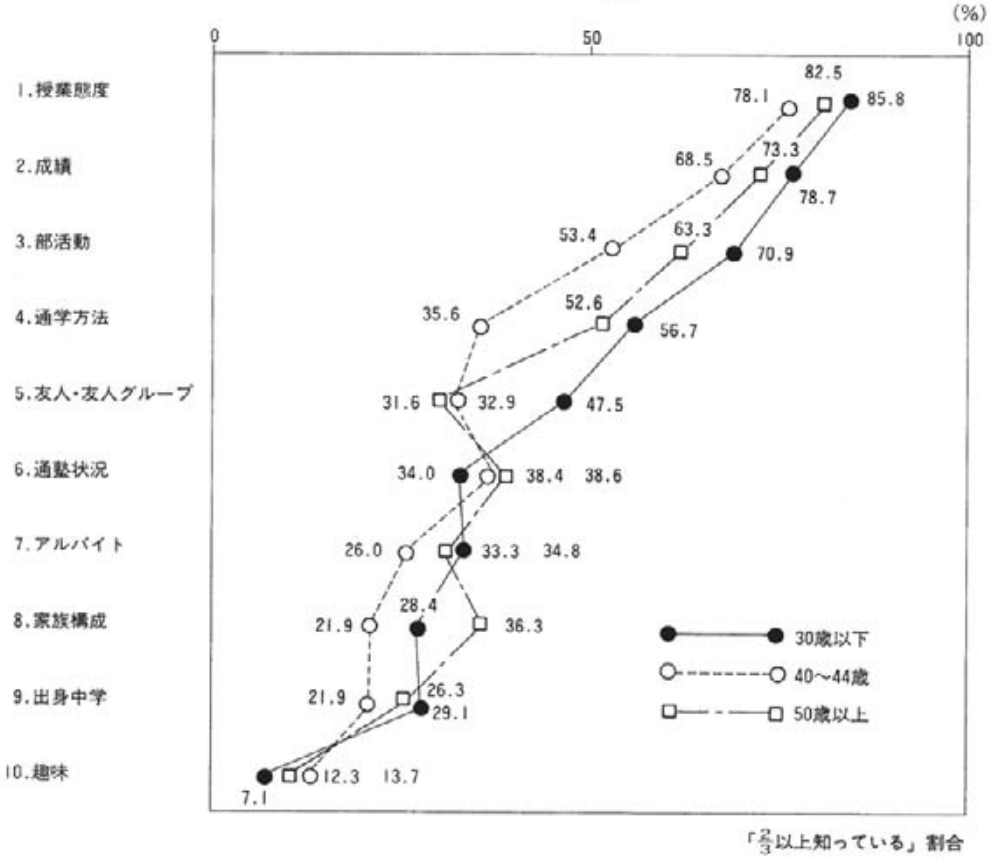
(%)

	90%以上	60～89%	30～59%	30%以下
1．授業態度	90.6	91.5	92.8	93.7
2．成績	87.5	89.0	90.4	92.6
3．部活動	86.9	85.3	88.0	88.0
4．通学方法	54.7	53.7	67.5	72.0
5．友人・友人グループ	61.0	62.2	65.0	78.6
6．通塾状況	51.5	56.1	56.6	51.2
7．アルバイト	42.2	45.2	46.0	50.3
8．家族構成	51.6	45.1	47.0	57.4
9．出身中学	35.9	37.8	42.2	52.0
10．趣味	40.6	29.3	38.5	37.7

※進学率

「$\frac{2}{3}$以上」+「半分くらい」の割合

図Ⅳ－3　自分のクラスの生徒についての知識×年齢



「$\frac{2}{3}$以上知っている」割合

4．教育指導の実際と必要度

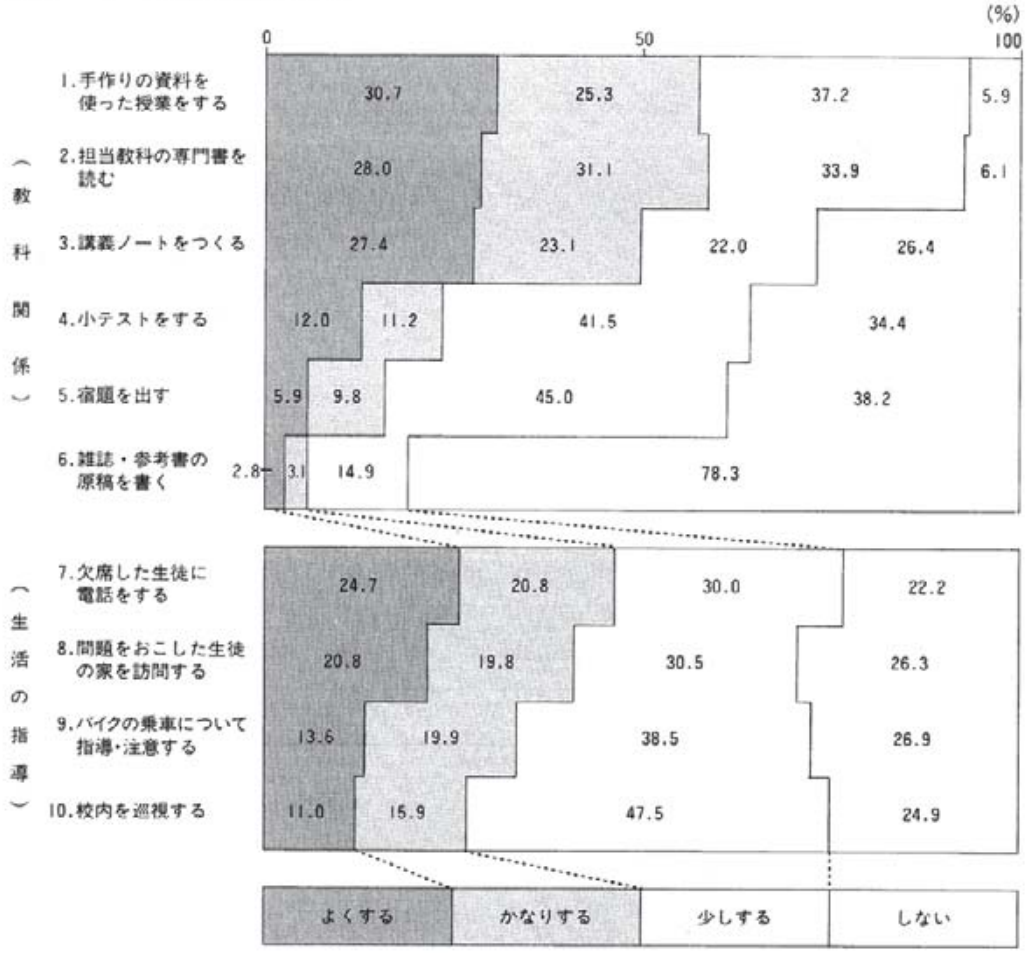
高校教師は、実際の仕事の内容とかかわって、自分たちにどんな能力・姿勢が必要と考えているのだろうか。

まず、教師の指導内容の実態をもう少し詳しくみておこう（図Ⅳ－4）。

教科の面では、半数以上の教師が、手作り資料で授業を行い、専門書をよく読み、講義ノートをつくっている。しかし、宿題を出す教師は少数派で（「よく・かなり」15.7%）、雑誌等に原稿を書く教師は、きわめて限られている。

一方、生活の指導面では、「欠席生徒への電話」を「よく・かなりする」が45.5%、同じく「問題をおこした生徒の家庭訪問」40.6%、

図Ⅳ－4　教師の日常の仕事



「バイク指導」33.5%、「校内巡視」26.9%となっている。項目の内容から考えると、いずれもかなり高い数値である。この領域が高校教師の仕事の中で大きな比重を占めていることがわかる。

表Ⅳ—4には、性・年齢別にまとめた結果を示した。性別では、「専門書を読む」「バイク指導」「校内巡視」等で、男性教師が女性教師を上まわっている。年齢別では、これまで同様「30歳以下」、次いで「50歳以上」の数値が高い。

なお、進学率（ランク）別データでは、教科に関連する項目中、「専門書を読む」で、進学率の高い高校の教師の数値が高かった。しかし、他の項目では、あまり大きな差は見られなかった。ただし、「手作り資料で授業」については、資料を手作りにする理由が異なるかもしれない。進学校—「教科書だけでは十分でないので」、非進学校—「教科書に生徒がついてこられないので」。

生徒の指導に関する項目では、次の2点が確認できた。

1．進学率が低いほど、「よく・かなりする」割合が大きくなる。
2．進学率の高い学校においても、数値は非常に低いとはいえない。進学率が90%以上の高校の教師も、4人に1人は、日常的に欠席した生徒に電話をかけたり、問

表Ⅳ—4　教師の仕事×性別・年齢

(%)

		性別		年齢		
		男性	女性	30歳以下	35～39歳	50歳以上
教科関係	1. 手作りの資料を使った授業	52.8	70.0	58.0	52.3	56.5
	2. 担当教科の専門書を読む	60.0	56.5	52.8	62.6	63.6
	3. 講義ノートをつくる	49.0	57.3	61.7	46.9	42.7
	4. 小テストをする	20.3	36.3	26.0	22.2	23.6
	5. 宿題を出す	13.5	25.3	11.2	14.4	20.0
	6. 雑誌・参考書の原稿を書く	6.6	2.4	3.0	7.0	12.0
生徒の指導	7. 欠席した生徒に電話	43.4	54.1	53.5	46.9	34.7
	8. 問題をおこした生徒の家庭訪問	41.6	37.2	45.4	40.7	31.5
	9. バイク乗車の指導・注意	36.9	20.1	43.5	26.7	31.1
	10. 校内巡視	28.2	21.7	27.9	19.7	32.9

「よく・かなりする」割合
◯＝最大値

題をおこした生徒の家庭を訪問している。

以上のような仕事をこなす中で、高校教師は、自分の教育指導にどのような能力・姿勢が必要と思っているのだろうか。

図Ⅳ－5に示したように、教師たちは、最も必要な能力として、「ホームルームの運営がうまい」をあげている。(「とても・かなり必要」80.8%) 以下、「問題をおこした生徒を諭す」(79.8%)、「進路相談に適切な指導」(75.6%)、「欠席生徒に電話」(61.0%)等が上位にあげられている。5位までに、授業内容に関する項目は、ひとつも登場しない。

授業内容については、ようやく9位に「専門性の高い授業」(43.1%)、10位に「大学入試に役立つ授業」(38.7%) があがる。しかし、教師たちは、「一声で生徒を静かにさせる」(57.7%) や「昼休み等に生徒と雑談」(54.5%) により必要性を感じている。

現代の高校教師は授業内容より、ホームルームの集団指導や個々の生徒へのさまざまなケアを重視している。「豊かな専門知識を持った授業者」たる高校教師は、実態としても、意識の上でも、少数派になってしまったらしい。

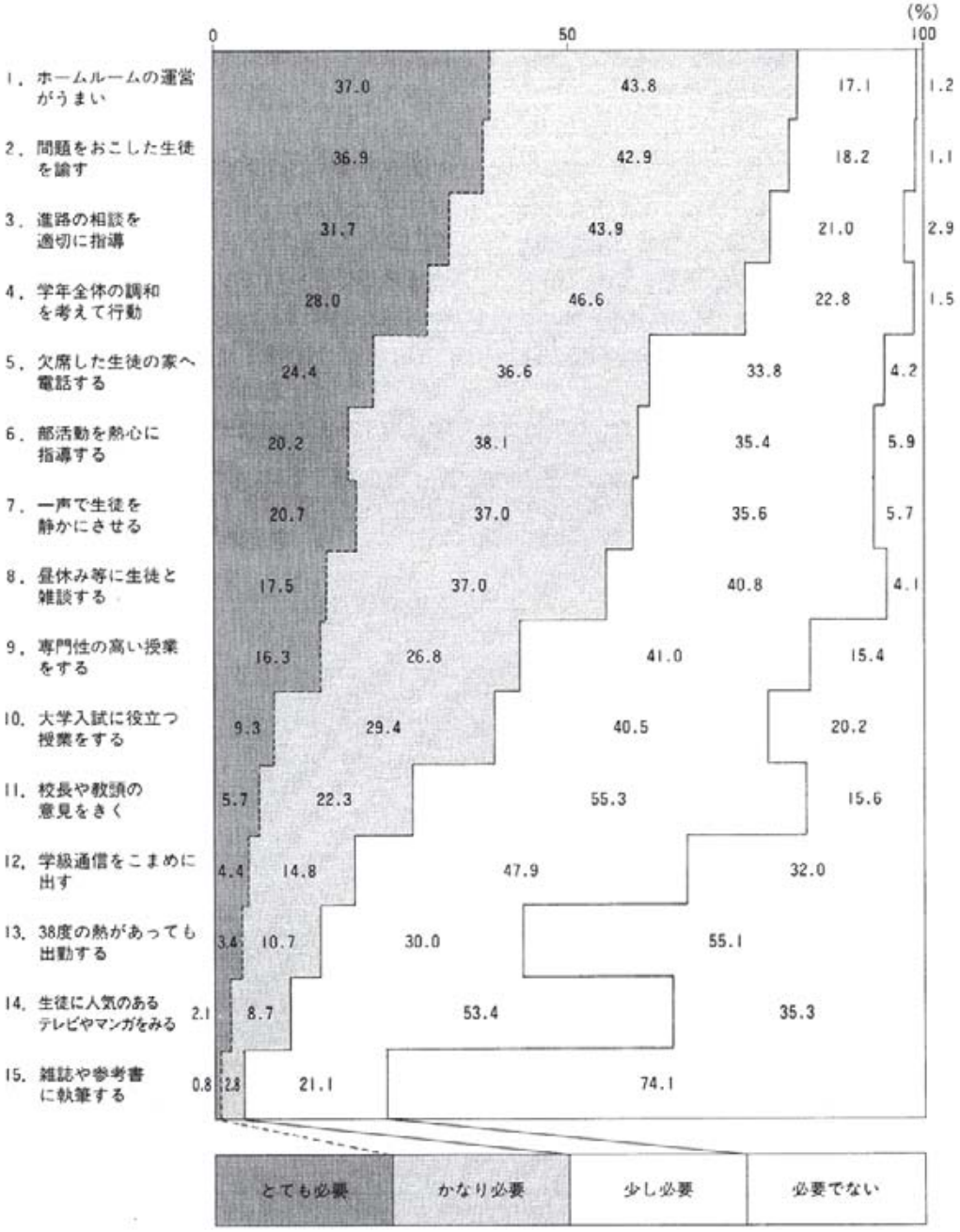
図Ⅳ－6は、進学率別にみた結果である。このデータから、進学校(90%以上)、非進学校 (30%以下) で、それぞれ望ましいと思われる教師像を描いてみよう。

進学校――専門性が高く、入試に役立つ授業ができる。また、生徒の進路相談には適切な指導を行う。

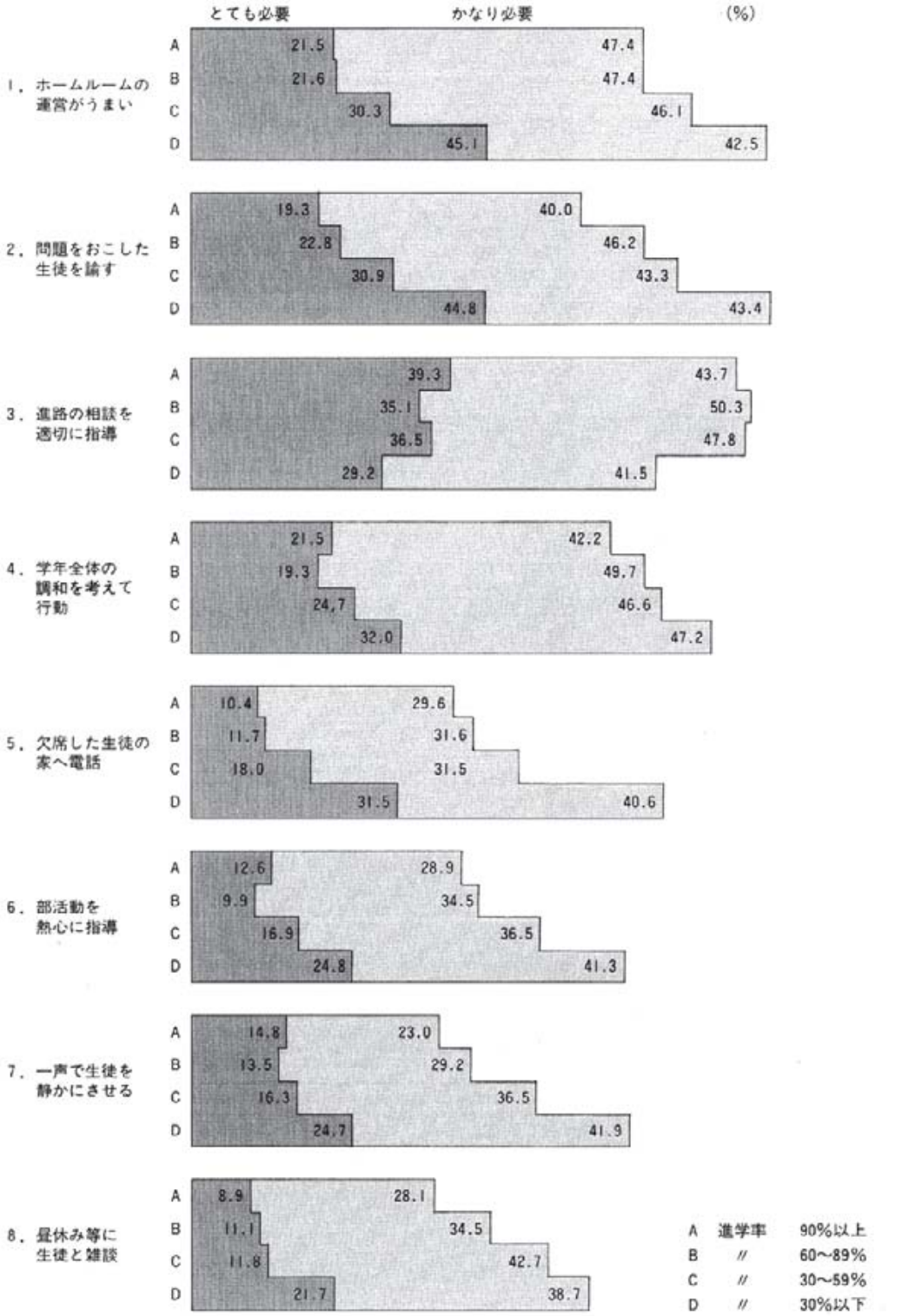
非進学校―H.R.経営がうまく、問題生徒をよく諭し、欠席者には電話する。生徒がうるさい時は一声で静かにさせ、部活動も熱心に指導する。

こうしてみると、勤務校の状況が、そのまま教師の意識に反映していることがわかる。

図Ⅳ－5　高校教師として必要な能力・姿勢

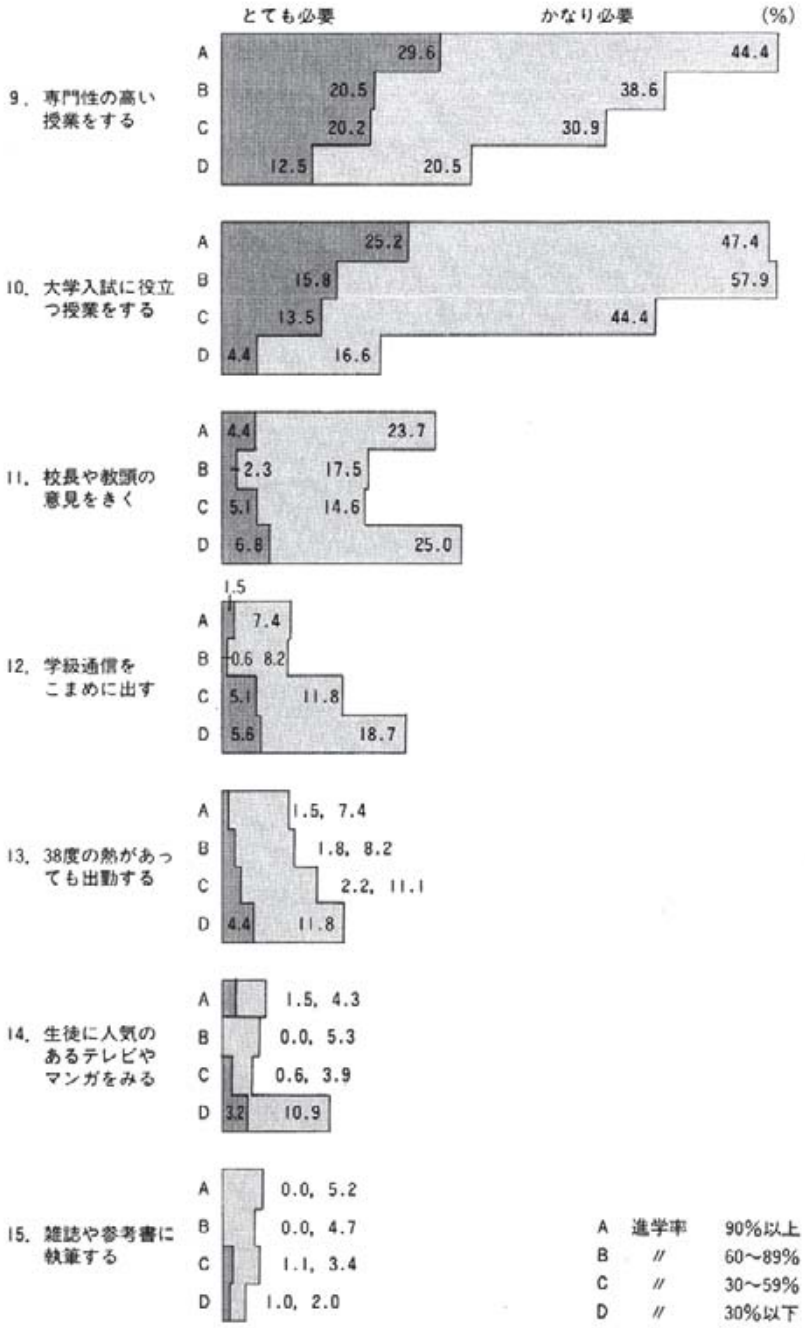


図Ⅳ—6　高校教師として必要な能力・姿勢×高校格差



—— 次頁へつづく ——

図Ⅳ－6　高校教師として必要な能力・姿勢×高校格差



まとめ

本シリーズのvol.10「高校教師の教育観とライフサイクル」に、次のような指摘がある。「……ほとんどの者が高校に進学する今日、『skill-trainner』だけの教師では多く学校で通用しなくなっている。生徒の行動を距離をおきながらも理解し、彼らとのヒューマンなふれあいを大切にする、『take care』の担い手となることも要求される」(「まとめに代えて」より)。

今回の調査結果は、この見解を支持している。しかし、「take care」の中身が、生徒の理解やヒューマンなふれあいといったカウンセラー的役割中心に語られている点が、やや気にかかる。

たとえば、10時を過ぎても登校してこない生徒に電話をかける。電話口の生徒に「今日はどうしたのかな？」と声をかけるのならば、「take care」といえよう。しかし、「いつまで寝てるんだ、早く出て来い！」と怒鳴りつけた場合はどうだろうか。

この章のデータからは、高校教師の仕事に、より指示的・管理的なものが増えていることがうかがえる。あえてひと言でいえば、「director」としての高校教師の役割が、増大しているといえよう。この点は、もっと注目されてよいように思える。

もうひとつ調査結果からみえてくるのは、高校教師をひとつのグループとして論ずることの限界である。進学校と非進学校で、教師の仕事内容・意識は大きく異なる。

大学教授なみの専門知識を滔々と講ずる教師、入試問題のヤマを正確に当てる教師、かけ算九九を教える教師、終日喫煙や万引きをした生徒を取り調べる教師、保護者に授業料の督促をする教師。これらの人々をひとつの枠に入れて検討するのは、いささか無理があろう。

高校教師が日常どんな仕事をしているのか、もう一度ていねいに洗い直す。そして、個々の教師の属性や勤務校の特性と関連づけて、整理・類型化を行う。このような作業をする時期にきているのではないだろうか。